職人として、作家として、それぞれの技で作品を創作する「雅山」

# 900年の伝統が息づく銅町 山形鋳物

## 銅と鋳物で栄えてきた町「銅町」

“山形鋳物”をご存じだろうか。1975年に国の伝統的工芸品に指定され、茶の湯釜といえば山形鋳物とされるほど評価が高い。山形鋳物の歴史は古く、900年以上前、平安時代に源頼義が奥羽平定に乗り出した際、従軍していた鋳物師が馬見ヶ崎川の砂と土質が鋳物に最適であることを偶然発見したことがはじまりだ。

「江戸時代に最上義光が城下町再編を行い、鋳物職人を一カ所に集め“銅町”が生まれました。ここは出羽三山神社への参詣者で賑わう門前町で、土産物として鋳物の仏具や日用品などもたくさん作られていました。さらに足踏み式の“たたら”の考案、山形唐金鋳物（ブロンズ）技術の確立で梵鐘や灯籠なども大量に鋳造されるようになり、銅町は一大鋳物産地へと発展したのです」と山形市役所の鈴木係長。

山形市商工観光部商工課
工業係長　鈴木直之氏

山形市商工観光部商工課
工業係主任　羽島悠平氏

時は移り、ミシンや自動車部品などの機械部品鋳物の需要も拡大。高度成長期には職人も増え、銅町では手狭だと山形西部工業団地へ多くの鋳物会社が移転していく。しかし、平成三年をピークに徐々に鋳物会社は減少。かつては立ち並んだキューポラが一斉に火を吹く壮大な姿を見ることができたが、いまは街路に建てられたモニュメントがその名残りを伝えている。

銅町の街路を飾る
キューポラのモニュメント

「山形鋳物は、南部鉄器と比べても繊細さで劣ることはありません。我々は後継者の育成などいろいろと応援していますが、大切なのはいまの時代にマッチしたこれからの山形鋳物のあり方をみんなで考えていくことです。その点、山形鋳物の工房のひとつ“雅山（がせん）”の長谷川さんは作品だけでなくいろいろ新たな試みを工夫されていますよ」と羽島主任。

## 職人と作家、二つの顔で時代のニーズに応える「雅山」

株式会社雅山
代表取締役　長谷川雅也氏

長谷川氏は雅山の四代目。銅の特性を知り尽した鋳造技術が、脈々と受け継がれてきた。

「確かに伝統技法を受け継ぐことは大切ですが、それだけでは生き残れない。うちには親とは違う技を学び、磨きなさいという教えがある。代々異なる得意な技を極めていくことで、新しい技を蓄積しているのです」。三代目は経済学を学んだが、長谷川氏は武蔵野美術大学で彫刻を専攻し、卒業後はイタリアへ。ろう型鋳造、胸像・モニュメントなどの彫刻分野の技を極めた作家としての顔も持つ。

「父は量産化への技術を磨き、確立しました。当時は日本の経済が活気に満ち、それを求めていたからですが、いまは違う。“個人の趣向に応える時代”に変わっています。他にはない個性的なこだわりの作品を作ることはもちろん、それを求める人の目にとまるようにどう営業をするかも大切なんです」。実は山形鋳物には産地問屋が存在しない。だから自ら作り、売るための工夫が必要となる。雅山では、百貨店の催事へ出展したり、ホームページ、またネット通販会社とも連携するなど様々な試みを行っている。

「代々雅山では銅器をメインにしてきました。お客様から“青銅の花瓶だと水が腐らなくていい”と言われますが、こうした銅の殺菌作用も上手に活かしてみたいですね。江戸時代に盛んに作られた銅の鍋や釜などもぜひ復活させてみたい。私は銅の魅力を山形鋳物で存分に表現できるように、新しい分野に挑み続けるつもりです」。そう言って見せていただいたのが白銅製茶釜（表紙参照）。白銅は他の銅合金に比べて硬く難しい素材で、茶釜に使うのは珍しい。だからこそやりがいがあると長谷川氏。実は雅山は、親子三代で日展作家という芸術家の家系でもある。職人として、作家としての二つの顔で、銅と山形鋳物の新しい道を切り拓こうとしている。

各種銅合金の特性を活かして多彩な作品を創作するそんな「雅山」の世界は… http://www.gasen.jp/